

2018年1月16日

【コラム⑱】～トルコの名産品イズニック陶器～

美しい色とデザインによって人々を魅了し続けるイズニックタイル。トルコではタイルが9世紀頃から作られはじめ、オスマン帝国時代である15～17世紀半ばにかけて文化的にも芸術的にも最盛期を迎えました。イズニックタイルの第一期と位置づけられる15世紀～16世紀半ばには、紺や青、緑、薄紫を基調にしたシンプルな彩色、第二期として位置付けられる16世紀半ば～17世紀半ばには特徴的な赤色も加わり、色彩鮮やかなものになっていきました。この時、陶器の主要な生産地となったのがトルコのブルサ県にあるイズニック（Iznik）です。イズニックでは古くからタイルや陶器に欠かせない良質な粘土が産出され、窯業が盛んな町として有名でした。オスマン帝国時代には、幾何学模様、唐草模様やバラ、カーネーション、チューリップなど植物の模様が主流となり、これらが描かれている陶器は宮廷社会でも人気を集めました。バラは神を、カーネーションは預言者ムハンマドを表していました。



イズニックにおける陶器の生産の歴史は古く、すでに紀元前7000年には陶器の生産があったようで、イズニック周辺で陶片が発見されています。この陶片はブルサにあるイズニック美術館にてみることができます。イズニックは1331年、オスマン軍によって征服され、以降オスマン帝国の領土となりました。トルコ領となる前のイズニックはニカイア、古典ギリシャ語でニケ（オリンポス12神の女神「勝利」を意味する）の町と呼ばれ、ヘレニズムの都市でした。ニカイアはその後、ローマ帝国、ビザンツ帝国を経て、トルコの領地になったのです。

イズニックの陶器は、基本的に元となる土に白色の土、すなわち化粧土を施し、下絵に色を付け、そのうえに透明な釉薬を塗り焼成されました。しかしイズニックの陶器を生み出すために使われた技術や知識、文献は職人たちによって門外不出として扱われていたことなどから、オスマン帝国の衰退とともに17世紀半ばを境に衰退し始めました。しかし、それから約400年後、イズニック財団（Iznik Vakıf Çinileri）が長年の調査や研究によって古来の伝統的な方法に従って陶器



を作ることになりました。現在イズニックでは 100 以上の陶器の店が建ち並び、陶器の町として観光客を迎え入れています。そしてもう一つ、キュタフヤ (Kütahya) も陶器の町に仲間入りを果たしました。イズニックでは以前のような良質な土を取ることができなくなってしまったため、陶器の生産場所をキュタフヤに移さざるをえなくなったのです。現在では、主にキュタフヤがイズニックに代わって窯業を



営んでいます。

イズニックタイルはモスクや美術館などに使用され、今でも様々な場所で見ることができます。イスタンブールでは、ブルーモスクやエミノニュ駅の近くにある天才建築家ミマール・スイナンによって建設されたリュステム・パシャ・モスク (Rüstempaşa Camii)、トプカプ宮殿 (Topkapı Sarayı)、イスタンブール考古学博物館の敷地内にあるタイル博物館 (Çinili Köşk) などでみることができます。ブルサのイエシルモスク (Yeşil Camii) では、緑の美しいタイルを見ることができます。そしてなんと日本でも東京都三鷹市の公益財団法人中近文化センターで

イズニックタイルが展示されています。展示の数は多くありませんが、日本でイズニックタイルをみることのできる数少ない場所です。そしてイスタンブールにお越しの際は、イスタンブールの風を感じながら素晴らしい本場のイズニックタイルをご鑑賞下さい。

トルコ共和国大使館・文化広報参事官室広報代理店

株式会社フォーカス